

バルト海を渡る送電線ー北欧とバルト 3 国の古くて新しい関係ー

村上 朋子

(戦略・産業ユニット 原子力グループリーダー)

2009 年 7 月 15 日、EU は、“Baltic Energy Market Interconnection Plan”(BEMIP)と題する、バルト海地域における送電線の多国間連系戦略構想を発表した。この構想は、EU が承認した国際送電線プロジェクトで、スウェーデンとリトアニアを結ぶ“NordBalt”(SwedLit ともいう)計画、フィンランドとエストニアを結ぶ“Estlink”計画から構成されている。

SwedLit はもともと、バルト海における洋上風力発電展開及びリトアニアへの市場進出を目指したスウェーデンの計画であった。この計画と、電力需要への対応を迫られていたリトアニア側の利害が一致し、2009 年 7 月 9 日にスウェーデン・リトアニア及びラトビアの送配電事業者間で合意したものである。これは、総額 5.16～7.38 億ユーロのプロジェクトで、2013 年の着工、2016 年の竣工を目指し、EU は総費用のうち 1.75 億ユーロを支援する。Estlink のほうは、1990 年代から基本構想があり、2002 年の厳冬をきっかけに 2003 年 3 月、両国(フィンランドとエストニア)の送電事業者間で海底送電線敷設に向け合意、2006 年 4 月には陸上における敷設工事が開始されている。BEMIP の一環として EU により承認されたのは前述の通り今年になってからである。

さて、この BEMIP は、当該国・地域、そして EU にとってどのような意義を持つのであろうか。

スウェーデン及びフィンランドにとっての意義は市場拡大である。すなわち、北欧の電力市場 Nordpool の更なる拡大発展先として、文化・人材面において交流の歴史も深いバルト 3 国と東欧に着目しているのである。現在ロシアにエネルギーの大半を依存しているバルト 3 国にとっては、北欧との送電網整備はエネルギー安全保障上、大きな利点となることが期待されている。

EU にとっては、欧州域内での成長性のある市場、かつエネルギー効率向上目標達成ポテンシャルの大きな地域と目されるバルト 3 国及び東欧諸国との関係強化は重要である。すなわち、EU の立場からもバルト海地域協力構想を推進する大きな意義があることから、本来は 2 国間の電力問題であった SwedLit や Estlink プロジェクトを EU として支援することになったと考えられる。

総括すると、かつては主に二国間で、あるいは当事者である電力会社間で進められていた、国境を越えた送電線敷設プロジェクトが、昨今の EU の地域協力構想に取り込まれ、EU 大のプロジェクトになりつつある、ということができる。BEMIP の将来展望とその欧州・世界に与える影響を考察するにあたっては、北欧諸国とバルト 3 国の関係の歴史的経緯も踏まえた上で、当該国間の経済・エネルギー・電力産業発展の経緯を注視していくことが重要である。

なお、まったく別の視点ではあるが、バルト海を渡る全長 300km 超の国際送電網が実現すれば、対馬海峡を隔てて 200km の距離にある韓国と日本の間の将来的における送電網連系の可能性についても、興味深い示唆が得られるのではないか。もちろん、地理的条件などの差異等を考慮する必要はあるが、新たな形で東アジア地域エネルギー協力のあり方を考える上でも興味深い事例となる可能性があるだろう。

以上

お問い合わせ : report@tky.ieej.or.jp